

## 利瑪竇『兩儀玄覽圖』攷

鈴木 信 昭

【要旨】韓国にある崇実大学校韓国基督教博物館で所蔵する『兩儀玄覽圖』は、イエズス会士マテオ・リッチが一六〇三年に中国で刊行した世界図である。この『兩儀玄覽圖』は、前年の一六〇二年にリッチが作製した『坤輿万国全図』とともによく知られた世界図である。しかし、『兩儀玄覽圖』は、『坤輿万国全図』とほぼ同じ形態の世界図であることから、これまで本格的な研究が行われてこなかった。そのため本稿では、『兩儀玄覽圖』の内容を書誌学的に分析すると同時に、『坤輿万国全図』の諸版本と比較して、その特徴を明らかにした。分析の結果、次のようなことが明らかとなった。第一点は、『兩儀玄覽圖』で二箇所地名が書き改められていた。書き改められた地名は、ポルトガルの国名表記とイスパニア内に記載するアンダルシアの地名表記である。なぜこうした改訂がなされたのか。その改訂には、リッチ以外のイエズス会士が関与した可能性があることを推察した。第二点は、『兩儀玄覽圖』に記載する天文図「十一重天図」の内容である。同天文図は『坤輿万国全図』と比較して、『兩儀玄覽圖』の最も特徴とするものである。しかし、同図は、天主が主宰する宇宙観を表しているものであり、中国人士大夫にはとうてい受け入れられるものではなかったであろうことを明らかにした。さらには、『兩儀玄覽圖』の内容をもとにして、現存明刊本『坤輿万国全図』の刊行年を推察した。

目次

はしがき

一、崇実大学校所蔵『両儀玄覽図』の現況

二、『両儀玄覽図』の内容

三、『坤輿万国全図』の諸版本

四、『両儀玄覽図』の特徴

(1) 「十一重天図」の特徴

(2) ポルトガル国名表記の相違

(3) イスパニア地域地名表記の特徴

はしがき

『両儀玄覽図』は、万曆三十一年(一六〇三)にイエズス会士マテオ・リッチ(利瑪竇)が中国で刊行した大型の世界図である。同図は、リッチが作製した事実は知られながらも、その前年の万曆三十年に版行した『坤輿万国全図』とは異なり、当初からその伝存は確認されていなかった。しかし、一九三六年になって朝鮮の江原道に住む黄炳仁氏が所蔵している事実が明らかとなり、にわかに注目を集めることとなった。ところが、同図は本格的な研究が行われる前に行方が分からなくなってしまった<sup>(1)</sup>。

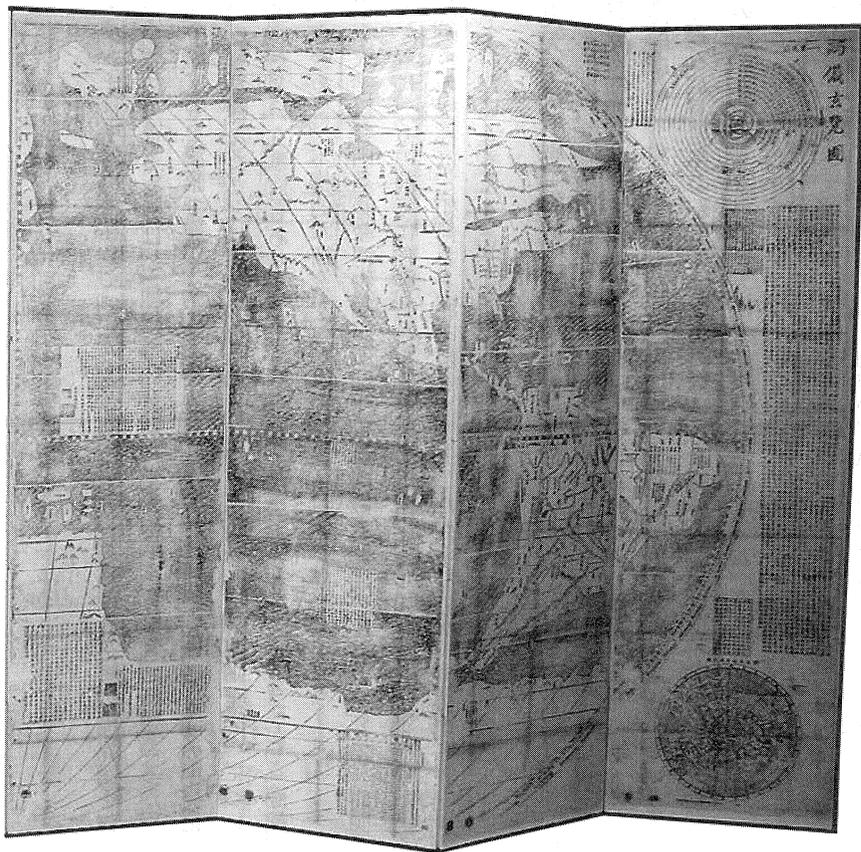
その後、一九四九年になると、中国瀋陽にある故宮でも『両儀玄覽図』が保存されている事実が判明した<sup>(2)</sup>。故宮で所蔵していたものは、黄炳仁氏所蔵のものとは異なり、着色された跡が残るものであった。さらに一九六〇年代になると、一時行方の不明であった黄炳仁氏所蔵の『両儀玄覽図』は、幸いにして韓国に住む金良善氏が新たに所蔵している事実も明らかとなった。同図は、その後、金良善氏によって韓国の崇実大学校に寄贈され、現在に至っているのであるが、『両儀玄覽図』は、こうして現在、二点の現存が確認されている<sup>(4)</sup>。

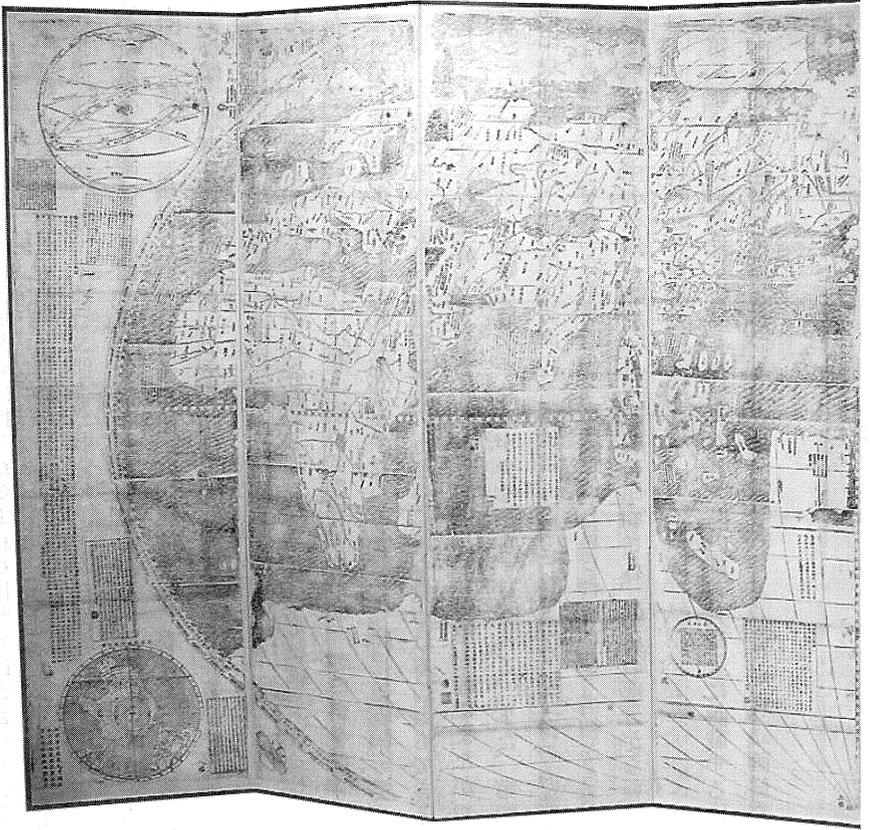
ところで、マテオ・リッチは中国に滞在していた一五年間に、都合五回にわたって世界図を作製したという<sup>(5)</sup>。その中で原刊本の現存が確認できるものは、『坤輿万国全図』と『両儀玄覽図』だけであるが、『両図』ともに、図中の地名や地誌、序文や跋文等を漢語で記し、中国の知識人を意識して、中国地域を図の中央に配置して版刻したため、中国で多くの反響を呼んだことは周知の事実である。しかし、『坤輿万国全図』については、当初からその現存が確認されていたという事情もあり、これまで数多くの研究がなされてきたが、『両儀玄覽図』については、その形態や内容も含めて、本格的な研究が行われているとは言いがたい<sup>(6)</sup>。そこで本稿では、崇実大学校韓国基督教博物館が所蔵する『両儀玄覽図』をもとにして、同図の形態や書誌の内容を明らかにするとともに、その前年に作製された『坤輿万国全図』との間にどのような記述内容の相違があるのか、またそうした内容の相違は、如何なる理由によって生じたものなのか、特に地名表記や天文図の違いを中心にしながら検討してみたいと考える。

#### 一・崇実大学校所蔵『両儀玄覽図』の現況

崇実大学校韓国基督教博物館が所蔵する『両儀玄覽図』は、八枚の木版刷りから構成されているものである。そのため本来は、『両儀玄覽図』の各幅の下端片隅に、それぞれ「一幅」から「八幅」というように、その幅数が記されていたはずであるが、現存のものには、第三幅に「三幅」、第五幅に「五幅」、第八幅に「八幅」と残存しているのみで、他の幅数は破損して見ることができない<sup>(8)</sup>。

一九三六年に撮影した『両儀玄覽図』の写真印画を見ると、板上に第一幅と第二幅というように、それぞれ二枚づつ並べて撮影していることから、当初から八枚がそれぞれのままの状態で保存されていたことが分かる。黄炳仁氏の家門では、同図を北京で手に入れてから、軸装や屏風に仕立てるといふことはしなかったであろう。





第1圖 『兩儀玄覽圖』(崇実大学校韓国基督教博物館蔵)

そのため、鮎澤信太郎氏が調査した段階では、各幅ともに折りたたまれた状態で保管されていたため、同図を広げて計測した結果は、「紙面の大きさが縦二〇三糎、横五八・五糎あり、印刷面の大きさが縦一九八糎、横五五・五糎」であったという<sup>(9)</sup>。

しかし、崇実大学校が所蔵する『両儀玄覽図』は、八枚ともそれぞれ裏打ちされ、八幅からなる屏風に仕立てあげられている(第一図)。同図が一九六七年に崇実大学校に寄贈された時点で、すでに屏風に仕立てられていたということから推察すれば、本来それぞれ折りたたんで保存していた八枚を、表装して屏風に仕立てたのは金良善氏ということになる<sup>(10)</sup>。

八幅の屏風仕立てとなった現在の『両儀玄覽図』の各幅の大きさは、それぞれ縦二〇一〜二〇一・五センチ、横五六〜五六・四センチとなっている<sup>(11)</sup>。同図の保存状態は極めて良好であるが、朝鮮戦争時、三ヶ月間土中に埋められていた影響もあつてか、破損や汚損で失われた部分が少なからずある。特に第五幅と第六幅、及び第七幅と第八幅の上部に所々欠漏した所があり、さらには数箇所<sup>(12)</sup>の土色の痕跡を見つけることもできる。

木版の刷り具合は、各幅ともに決して良好とは言えない。特に第一幅から第三幅にまたがって描かれている「南北亞墨利加(アメリカ)」では、判読が困難な地名や註記が少なからず見られる。また、第四幅にある現在の北太平洋の一部、第五幅中央部にある現在の南シナ海の一部には、印刷されていない空白の海洋部分も存在する。こうした印刷不鮮明な箇所<sup>(13)</sup>の存在は、一九三六年当時の写真印画にも見られるため、当初からあつたものである。現存明刊本『坤輿万国全図』の大洋中の波形が繊細、且つ鮮明に印刷され、空白の部分がないことに較べれば、現存の『両儀玄覽図』は、いささか印刷が不鮮明なものである。

さらには、第一幅から第八幅まで卵形図法によつて描かれた五大陸内部と大洋上に記載する地名や註記の彫字は、現存明刊本『坤輿万国全図』と比較した場合に、やや乱雑である。こうした点は、『両儀玄覽図』の版刻が

短時間で行われたか、或いは刻工の技量がさほど高くなかったことをあらわしているのかもしれない。<sup>(12)</sup>

ところで、前述した如く『両儀玄覽図』は、全八幅からなる木版の大型の世界図であるが、その記載する内容が全六幅の現存明刊本『坤輿万国全図』とは少なからず異なっている。その大凡の相違点については、これまで先学の研究によって、ある程度指摘されているが、<sup>(13)</sup>次項では、現存明刊本『坤輿万国全図』と比較して、『両儀玄覽図』の各幅にどのような事項が記載されているのか、まずその点を確認しておきたい。なお、『坤輿万国全図』の諸版本については後述する。

## 二、『両儀玄覽図』の内容

『両儀玄覽図』の第一幅には、最上部右端に「兩儀玄覽圖」と題字が縦書きされており、その左横に、「十一重天図」と「按ズルニ列宿ノ日月星ノ諸天ハ（按列宿日月星諸天）」から始まる説明文があり、その下に、「地ト海トハモトコレ円形ニシテ（地與海本是円形）」という書き出しで始まる十四行にわたる世界図総説と十二行にわたる「四行論」が記載されている。題字と「十一重天図」以外は、現存明刊本『坤輿万国全図』と同様の内容である。ただし、世界図総説については、『両儀玄覽図』では十四行、現存明刊本『坤輿万国全図』では十二行にわたってそれぞれ記されているという違いがあり、さらには同文中の字句についてもそれぞれ八箇所相違が見える。例えば、その違いの一例を挙げれば、現存明刊本『坤輿万国全図』三行目には「各一週有九万里」とあるが、『両儀玄覽図』では「九」が欠落して「各一週有万里」となっている。<sup>(14)</sup>

また『両儀玄覽図』の世界図総説の行数が十四行に増えた理由は、両図を比較すれば明瞭であろう。現存明刊本『坤輿万国全図』では、題字の「坤輿万国全図」と「地與海本是円形」から始まる世界図総説を、第一幅右端から枠を設定して行数と字数を計算して版刻し、さらには卵形図法によって世界図を描いたためにできた四隅の

余白のうち、第一幅の上端の余白に「九重天図」を挿入したと考えられる(第2図)。ところが『両儀玄覽図』では、おそらく初めに第一幅上端に題字と「十一重天図」を大きく配置してしまったのであろう。それがために世界図総説を「十一重天図」の真下に置かざるを得なくなり、必然的にその行数も増やさざるを得なくなったものと考えられる(第3図)。

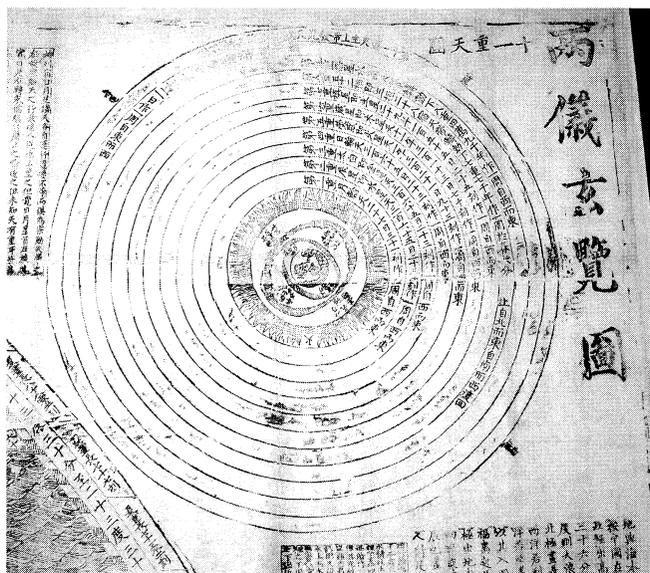
なぜ、リッチは『両儀玄覽図』で「十一重天図」を大きく記載するという措置をとったのであろうか。「九重天図」よりも新知見を入れた「十一重天図」に注目してもらいたかったためであらうか。この「十一重天図」の円形の大きさは、第八幅上端の「天地儀」の円形の大きさと同じである。それに反して第一幅と第八幅の下端にそれぞれ記す赤道南北両半球図は小円である。題字である「両儀玄覽図」の「両儀」とは、天と地を意味するものであるが、リッチは天文に関する「十一重天図」と「天地儀」に注目してもらいたがために、あえて両図をより大型にし、その結果として、世界図総説の文章全体が圧縮した形となってしまったのであろうか。いずれにせよ、「十一重天図」と「天地儀」を赤道南北両半球図に比して大型の円形としたリッチの意図は不明である。

なお、現存明刊本『坤輿万国全図』では、世界図総説の末尾に「利瑪竇撰」と記し、さらに世界図総説全文の左方にイエズス会の円形の会章を載せているが、『両儀玄覽図』では両方とも欠いている。

第一幅下端には、「赤道北地半球之図」とその説明文が記載されている。そもそも現存明刊本『坤輿万国全図』では、「赤道北地半球之図」を第六幅上端に記載しており、同じ第六幅下端には「赤道南地半球之図」を配置して、両図が第六幅の上下で対になるようにしていたものである。そのため現存明刊本『坤輿万国全図』では、第一幅の下端に「天地儀」を配して、上端の「九重天図」と対になるようにしていた。ところが『両儀玄覽図』では、「赤道北地半球之図」と「天地儀」の場所をそっくりと入れ替えてしまっている。リッチには、天に関する「十一重天図」と「天地儀」は上端に、地に関する赤道南北両半球図は下端にそれぞれまとめたという意図があっ



第2図 現存明刊本『坤輿万国全圖』第一幅の「九重天圖」



第3図 『兩儀玄覽圖』第一幅の「十一重天圖」

たのかもしれない。

なお、『両儀玄覽図』第一幅の下端に移された「赤道北地半球之図」は、現存明刊本『坤輿万国全図』に記載する同半球図(海陸の形状と地名)と同様である。しかし、一箇所だけ相違がある。現存明刊本『坤輿万国全図』の「赤道北地半球之図」では、現在のインド洋上に「小西洋」と記載するが、『両儀玄覽図』では欠落している。リッチ、或いは刻工の見落としてであろうか。

第二幅には、「南北亞墨利加」と現在の西インド諸島、並びにその地域の地名が記載されている。現存明刊本『坤輿万国全図』では、「北亞墨利加」大陸の大西洋側に大きく入りくんだ湾があり、その湾岸に「摩可沙國」とあるが、『両儀玄覽図』では、ただ「國」とあるのみである。

第三幅には、現在の太平洋中に吳中明の「鄒子稱中國」から始まる序文があり、また南方の「墨瓦臘泥加」大陸内には「總論横度里分」がある。両方とも現存明刊本『坤輿万国全図』では第二幅にあったものである。吳中明の序文の字数と行数、並びに「總論横度里分」中の数字は現存明刊本『坤輿万国全図』と同様である。

第四幅には、太平洋中に馮應京の序文、「墨瓦臘泥加」大陸に常胤緒の序文と阮泰元の跋文が記載されている。現存明刊本『坤輿万国全図』では、それぞれ李之藻の序文、楊景淳の序文、陳民志の跋文が掲載されていたのであるが、『両儀玄覽図』では書き替えられたものである。

なお、常胤緒の序文中、題字全体と本文初行の大部分と第二行の一部は完全に剥落している(一九三六年の写真印画では残っている)。この序文の右側が黄土色に変色していることから、この剥落の原因は、前述したように、土中に三ヶ月間埋められていた時の雨水によって生じた腐食によるものかもしれない。

第五幅には、「墨瓦臘泥加」大陸の中に李應試の「刻兩儀玄覽圖」と題する序文が記載されており、その序文の末尾には「萬曆癸卯秋分日耶蘇教學子葆璋李應試撰」とある。本来、現存明刊本『坤輿万国全図』の同位置(第



第4図 『両儀玄覧図』第五幅の朝鮮半島部分図

四幅）には、利瑪竇の序文が掲載されていたが書き替えられたものである。また、同じく「墨瓦臘泥加」大陸の中には円形に縁取りされた「看北極法」がある。これは現存明刊本『坤輿万国全図』に見えるものと同様であり、また掲載する場所も同じである。

この第五幅には、地域としては中国や朝鮮、日本などが記載されているのであるが、朝鮮半島の部分には、もともと「朝鮮」と版刻されているにもかかわらず、さらに大きく「朝鮮」と朱書している（第4図）。一九三六年撮影の写真印画にも同字が見えることから、それ以前から書き込まれていたものである。「諺文」で書かれているのであればいざ知らず、誰がいつ頃、どんな目的で朱書したのか、全く不明である。さらに、現存明刊本『坤輿万国全図』と『両儀玄覧図』ともに、朝鮮半島の北方に「女直」と「奴兒干」という地名が隣り合って記載されているが、『兩

儀玄覽図』では、両地名の間に新たに山脈を版刻して、両地域が山脈によって遮られているようになっていた(第4図)。現存明刊本『坤輿万国全図』にはなかった山々である。リッチの原本に当初から描かれていたものなのか、刻工が誤認して刻んだものなのか不明である。

第六幅には、現在のインド洋中に侯拱宸の序文がある。現存明刊本『坤輿万国全図』(第五幅)では、祁光宗の序文であったが、書き替えられたものである。「墨瓦臘泥加」大陸内には、現存明刊本『坤輿万国全図』と同じ「太陽出入赤道緯度」と題する表とその説明文がある。また同大陸内には「萬曆三十一歲癸卯仲秋旦耶蘇會中人利瑪竇書」と後記する利瑪竇の序文が書き加えられており、さらにその序文の後には、円形と方形のイエズス会の会章がそれぞれ刻されている。

ところで、『両儀玄覽図』と『坤輿万国全図』諸版本の刊行された年月の問題については後述したいが、前述したように第五幅にある李應試の序文に「萬曆癸卯秋分日」とあり、また、利瑪竇の序文にも「萬曆三十一歲癸卯仲秋旦」とあることから、『両儀玄覽図』の刊行年月は、万曆三十一年八月であることが明らかとなる。

第七幅上部には、卵形世界図欄外の余白があり、そこには「月蝕図」と「日蝕図」が描かれているが(剥落箇所が少なからずある)、両図とも現存明刊本『坤輿万国全図』(第六幅)にあるものと同じである。またこの第七幅には、「利未亜(アフリカ)」大陸中央部が描かれているが、現存明刊本『坤輿万国全図』の「齊歴湖」畔にあるべき山脈が欠落していたり、「黒人國」の上にある一行分の註記が赤道の上方に移動して記載されていたりと、いくつかの相違が見える。

第八幅には、前述したように、最上端に「天地儀」とその説明文がある。しかし、「天地儀」の題字、及び同図の一部は剥落している。「天地儀」の下には、『元史』(巻五二)からの引用文(現存明刊本『坤輿万国全図』では第一幅にある)、その左方には「地球ハ九重天ノ星ニ比シテ、遠ク且ツ大ナルコト幾何カヲ論ズ(論地球比

九重天之星遠且大幾何」から書き始められる天文図総説とでもいふべき後文が記され、最下端には「赤道南地半球之図」とその説明文がある。いずれも現存明刊本『坤輿万国全図』と同様のものである。

この第八幅で唯一の例外は、「利瑪竇識」と記す利瑪竇の序文が十行にわたって記載されていることである。また、その文末には円形のイエズス会の会章が版刻されている。それぞれ現存明刊本『坤輿万国全図』にはなかったものである。

以上、『両儀玄覽図』各幅の内容について、現存明刊本『坤輿万国全図』と比較しながら概観してきた。ここで両世界図の全般的な相違点を挙げれば次のようになるであろう（なお『両儀玄覽図』には言及した以外に、現在のアルプスの山々が記載されていないなどまだ数箇所相違が見えるものの、ここでは全てを取り上げなかった）。

第一は、現存明刊本『坤輿万国全図』に記載する図や文章が、『両儀玄覽図』においてもその内容と掲載位置をそのまま踏襲しているものがあることである。第一幅の「地與海本是圓形」の書き出しで始まる世界図総説や第八幅の「論地球比九重天之星」の書き出しで始まる天文図総説、「赤道南地半球之図」などがこれに該当する。

第二は、現存明刊本『坤輿万国全図』に記載する図や文章が、内容が変わらないまま『両儀玄覽図』でも踏襲されるが、掲載する位置が変更されているものがあることである。第一幅の「赤道北地半球之図」や第八幅の「天地儀」などがこれに該当する。イエズス会の会章もこれに類すると言えるであろう。

第三は、現存明刊本『坤輿万国全図』に記載していた図や文章が、『両儀玄覽図』においては、その内容が変更されているものがあることである。第一幅の「九重天図」以外に、第一幅から第八幅に散在している中国人士大夫らの序文などがそれに該当する。例えば、第四幅にある馮應京や常胤緒の序文、阮泰元の跋文、第五幅にある李應試の序文、第六幅にある侯拱宸や利瑪竇の序文などである。これらリッチや中国士大夫らの文章に限っ

て見れば、唯一第三幅にある吳中明の序文のみが、現存明刊本『坤輿万国全図』と同じものである。

第四は、現存明刊本『坤輿万国全図』にはなかったが、『両儀玄覽図』に初めて登場するものである。これについては、第八幅にある「利瑪竇識」と後記する利瑪竇の序文が該当する。

なお、『両儀玄覽図』の第二幅や第五幅、或いは第七幅における地名や地誌表記の違いについてはどのように判断したらよいのであろうか。リッチによつて意図的に行われたのであろうか。それとも刻工による誤刻と見てよいのであろうか。

以上、検討してきたように、現存明刊本『坤輿万国全図』と『両儀玄覽図』とを比較した場合、その内容と形態において少なからず変更した箇所があった。世界図の作製を李之藻と李應試から、それぞれ依頼されたのであれば、内容が異なるのは当然のことかもしれないが、『坤輿万国全図』を刊行して一年後に、このような少なからざる変更を加えてまで『両儀玄覽図』を刊行したリッチの「熱意」をそこから窺い知ることができる。しかし、『両儀玄覽図』には、以上のほかに変更点はなかったのであろうか。現存明刊本『坤輿万国全図』と比較しながら検討を続けてみたい。

### 三、『坤輿万国全図』の諸版本

まず始めに、『両儀玄覽図』の特徴、特に天文図と地名表記における現存明刊本『坤輿万国全図』との異同について検討する前に、最近明らかとなった『坤輿万国全図』の諸版本について述べておきたい。

海野一隆氏によれば、現存する『坤輿万国全図』には、その第一幅にある「九重天図」、第三幅にある李之藻の序文(初行と第二十二行)、さらには第六幅にあるイベリア半島のポルトガル国名とその沖合に記載するポルトガルに関する註記の相違などから、『坤輿万国全図』は、初版が刊行された後、都合二回にわたつて改訂が加

えられた事実があるという。<sup>(15)</sup>

本来、『坤輿万国全図』は、同図中の利瑪竇、及び李之藻の序文に記名する如く、万曆三十年七月に刊行されたものである(初版)。ところが海野氏は、現存する諸版本と模写本に相違点がある事実を根拠にして、『坤輿万国全図』は、印刷された直後に、同図の版木を所有する李之藻が自らの序文の二箇所(初行と第二十二行)を改刻して刊行したもの(第一次改訂版)、続いて翌万曆三十一年七月以前までに、リッチの依頼によって李之藻が所持する版木の「九重天図」中の第八重天に記載する年数とポルトガル国名を改刻、並びにイベリア半島沖の二行にわたる註記を埋木し削除した第二次改訂版が刊行されたであろうとした。この第二次改訂版こそが、本稿でこれまで表記してきた現存明刊本『坤輿万国全図』のことである。ちなみに、『坤輿万国全図』の初版、第一次改訂版の原刊本は現存していない。その模写本のみが伝えられるだけである。そのため唯一現存する第二次改訂版のことを現存明刊本『坤輿万国全図』と呼んでいる。<sup>(16)</sup>

『坤輿万国全図』に初版と第一次改訂版、さらに第二次改訂版がそれぞれ存在していたとすれば、本稿で考察の対象としている『両儀玄覽図』を、リッチの世界図作製過程の中で、どのように位置づけたらよいのであろうか。海野一隆氏の説に従えば、『坤輿万国全図』の初版が万曆三十年七月に刻版され、その直後に第一次改訂版、そして万曆三十一年七月前に第二次改訂版が出版され、同年八月に新たな版本に刻された『両儀玄覽図』が刊行されたということになる。

とりあえず、『両儀玄覽図』には李之藻の序文がないため比較の対象とならないが、それ以外の『坤輿万国全図』第一幅に見える「九重天図」の中の第八重天と、第六幅に記載するポルトガルの国名表記、並びにイベリア半島沖の註記については、『両儀玄覽図』のものとも関連するため、海野氏が指摘した『坤輿万国全図』諸版の相違点を表に示せば次のようになる。

	九重天図 (第八重天)	ポルトガル国名 (註記)	判断資料	刊行年月
初版(初刷)	第八重二十八宿天七千年	拂郎機(拂郎機乃回回誤稱本名波尔杜曷尔)	江戸時代初期本邦模写本	万曆三十年七月
第一次改訂版	同上	同上	東洋文庫清代模写本など	万曆三十年七月直後
第二次改訂版 (現存明刊本)	第八重二十八宿天四萬九千年	波爾杜瓦爾(註記は埋木によって抹消)	現存明刊本	万曆三十一年七月以前

(海野一隆「利瑪竇『坤輿万国全図』の諸版」に掲載する第三表[一一〇頁]をもとにして作成)

それでは『両儀玄覽図』において、「十一重天図」中の第八重天、ポルトガルの国名表記、並びにイベリア半島沖の註記がどのように記載されているのであろうか。海野氏の研究成果に従えば、万曆三十年七月に刊行された『坤輿万国全図』初版の「九重天図」中の第八重天、並びにポルトガル国名表記とその註記の誤りに気がついたリッチは、その部分の改刻を行い、翌万曆三十一年七月までに第二次改訂版を刊行したことになる。それでは、こうした第二次改訂版『坤輿万国全図』における三箇所(の修正は、同年の翌八月に刊行された『両儀玄覽図』でいかされているのであろうか。

結論から先に述べれば、『両儀玄覽図』の「十一重天図」に見える八重天で記載する内容は「第八重二十八宿天七千年」とあり、『坤輿万国全図』の初版、並びに第一次改訂版と同様であり、ポルトガルの国名表記とイベリア半島沖の註記は、『坤輿万国全図』のいずれの版とも異なっている。さらには、これまで指摘されてこなかったことであるが、世界図の地名表記の中に、新たに地名の改訂された部分が一箇所存在する。その地域とは、現在のイベリア半島に見えるイスパニア国内の地名である。リッチが『両儀玄覽図』でなぜこのような改訂を行ったのかという問題も含めて、次項において詳しく検討してみたい。まずはじめは「十一重天図」から見よう。

#### 四. 『両儀玄覧図』の特徴

##### (一) 「十一重天図」の特徴

『坤輿万国全図』に掲載する「九重天図」は、既に先学が指摘する如く、「九重天説はもちろんアリストテレスの天体構造論に基づいたものではあったが、従来、中国に伝統的だった『楚辭』『天問篇』にみえる「九天説」といわれるものによく似たモデル」であった<sup>(17)</sup>。ここでいう「アリストテレスの天体構造論」とは、アリストテレス (Aristoteles B C三八四～三二二) が『宇宙論』<sup>(18)</sup>で展開した地球を中心とその回りを軌道する月や太陽、五惑星 (水星・金星・火星・木星・土星) の天体構造のことをいうのであるが、アリストテレスの『宇宙論』は、その後、中世のヨーロッパに伝えられ、そこでさらに発展して、一四七二年に英国の修道士ヨハネ・デ・サクロポスコ (Joannes de Sacrobosco) の『天球論』によって、不動の地球を中心とその回りを第一天 (月) から第十一天 (エムピレウム [Caelum Empireum 諸聖人の座]) へと外輪を広げていく天体構造論として完成し、「スコラの天文学は一応の完成を見たのである」<sup>(19)</sup>。

しかし、サクロポスコの『天球論』は難解であったために、その後、多くの註解者が現れることとなった。そのなかでも著名だったのがマテオ・リッチの師であるコレジオ・ロマーノの教授クリストファ・クラヴィウス (Christopher Clavius 一五三七～一六一二) が著した『サクロポスコ天球論註解』(一六〇二年刊) であつたといふ。

中国に來航する前にコレジオ・ロマーノでクラヴィウスから数学・天文学を教授されたマテオ・リッチにしてみれば、中国の士大夫に説く宇宙論は、当時西欧における最新の天体論、つまり第一天から第十一天に至る天体論でなければならなかつたはずである。しかし、リッチは『坤輿万国全図』の作製にあたって、敢えてそれをせ

ずに、中国の伝統的天体説である『楚辭』の「九天説」と、それを理論的に再構築した朱子の「無限宇宙論」<sup>(20)</sup>に迎合した「九重天図」を版刻したのである。なぜリッチはこうした措置をとらねばならなかったのであろうか。「九重天図」(第2図参照)は、中心に不動の地球を置き、その外側に向かつて、第一重天の月輪天、第二重天の水星天、第三重天の金星天、第四重天の日輪天(太陽)、第五重天の火星天、第六重天の木星天、第七重天の土星天、第八重天の二十八宿天、そしていちばん外側に天を動かす宗動天というように、それらが同心球状に配置されているのであるが、これはまさに朱子が考えた「天には、月・太陽・五惑星および恒星が存在する」<sup>(21)</sup>とする天体論と符合するものであった。中国人士大夫にとって、西欧の天文学的新知見を一部含んだ「九重天図」は、何ら異とするに足りなかつたであろう。

ところが、リッチが『両儀玄覽図』を複製するに際して採用した天体図は「十一重天図」である。これこそがまさにリッチがクラヴィウスから学んだ最新の天体構造論であつた。『両儀玄覽図』に記載する「十一重天図」の天体構造は、クラヴィウス『サクロポスコ天球論註解』に記載する内容と全く同様のものである。<sup>(22)</sup>

それでは「十一重天図」(第3図参照)には、どのような内容が記されているのであろうか。「十一重天図」の第一重天から第八重天までは「九重天図」と同様である(なお、地球からの距離数については、煩雑になるため本稿で詳論することは控えたい)。しかし、第九重天から相違している。まず第八重天は二十八宿天となつているが、第九重天は「無星水晶天」となり、第十重天は「無星宗動天」、そして最も外側の第十一重天は「天主上帝発見シ、天堂諸神聖ノ居スルトコロ、永静ニシテ不動ナリ(天主上帝発見天堂諸神聖所居永静不動)」<sup>(23)</sup>となつているのである。

果たして、天主・上帝や聖人が住む第十一重天の存在を中国人士大夫らはどのように受け取つたのであろうか。おそらく彼らには、その説はどうてい受け入れられるものではなかつたであろう。<sup>(24)</sup> 彼ら士大夫にとって、天とは

清なる気から生成するものであり、それがやがて日月となり、星辰となつて、大地の外側を円環しているものでなければならなかった。天主や聖人が外輪に主座して、天は勿論のこと大地までも主宰しているなど信じることはできなかつたであろう。それではなぜリッチは「九重天図」を棄てて、中国人士大夫の反感をかうことが予想される「十一重天図」を敢えて採用したのであるうか。

おそらくそれは、『両儀玄覽図』の依頼者が李應試であつたからこそ可能だつたのではなからうか。李應試は、明末の豊臣秀吉の朝鮮出兵の際に、明の將軍李如松の参謀をつとめたことにより、『明史』(卷二三八、「列伝」卷二六の「李成梁」伝中に李應試に関する記事がある)にその名をとどめているが、彼は『両儀玄覽図』が刊行される一年前の万曆三十年八月に、リッチの洗礼を受けて天主教徒となつた人物である。李應試が天主教信徒であつたればこそ、「十一重天図」の版刻が可能となつたであろうし、また同図を理解・受容することもできたであろうと考えられるのである。いずれにせよ、「天主」と「天堂(天国)<sup>(25)</sup>」という漢語を刻す「十一重天図」は、リッチが『天主実義』で説く天主と天堂の存在を視覚的に表すものであり、キリスト教に関心のある中国人士大夫には有益であつたかもしれないが、それ以外の者にとっては無益なものであり、むしろ反発さえ感じさせるものではなかつたかと考えられる。

『両儀玄覽図』の最も大きな特徴は、この「十一重天図」である。この「十一重天図」を読み解くことによつて、誰のために『両儀玄覽図』が刻されたものなのか、マテオ・リッチの思惑などを窺い知ることが出来るようになる気がする。それでは次に、地名表記の相違について検討を加えていきたい。

## (2) ポルトガル国名表記の相違

それでは地名表記の相違、特に『両儀玄覽図』のイベリア半島内の国名・地名はどのようになっているのであ

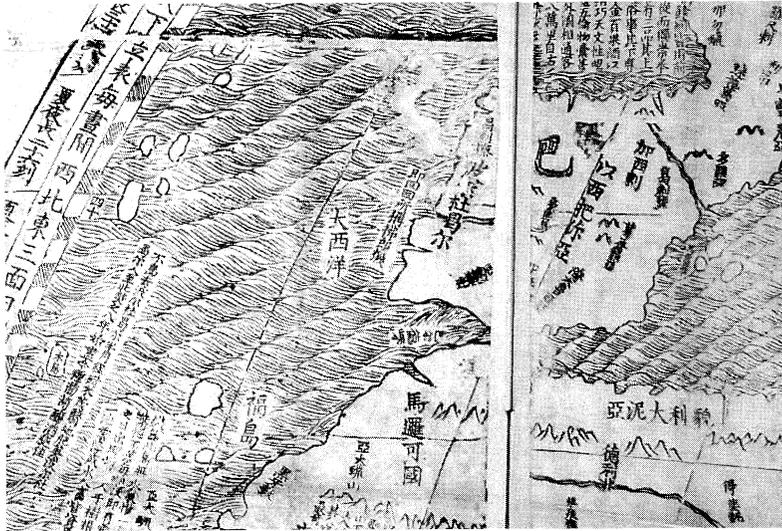


第 5 図 現存明刊本『坤輿万国全図』第六幅 イベリア半島部分図

ろうか。まず始めにポルトガルの国名表記から見ていき  
たい。

前述したように、海野一隆氏の研究によれば、『坤輿万国全図』の初版と第一次改訂版では、イベリア半島内に記されているポルトガルの国名が「拂郎機」とあり、同半島沖合に記載する註記が二行にわたって「拂郎機ハ乃チ回回ノ誤稱ニシテ、本ノ名ハ波爾杜曷尔ナリ(拂郎機乃回回誤稱本名波爾杜曷尔)」となっているが、『坤輿万国全図』の第二次改訂版、つまり現存明刊本『坤輿万国全図』(なお、本節では版本の先後が理解しやすいように現存明刊本ではなく第二次改訂版を多用する)では、ポルトガルの国名が「波爾杜瓦爾」と改刻され、さらにはイベリア半島沖合の二行分の註記が部分的に削除されて、波の形になるように埋木されているという(第5図<sup>26)</sup>)。

しかし、『両儀玄覽図』では、(第6図)に見えるように、ポルトガルの国名を「波爾杜曷尔」としており、またイベリア半島沖の註記は「即チ回回ノ稱スル所ノ拂郎機(即回回所稱拂郎機)」と改訂しているのである。



第6図 『両儀玄覧図』第七、第八幅のイベリア半島部分図

ところで、『坤輿万国全図』の初版と第一次改訂版では、世界図の中に「佛郎機(或いは佛郎幾、佛郎幾、佛郎機とも記す)」と記載するところが、上記二箇所以外に四箇所ある。一つは、『坤輿万国全図』第二幅、「墨瓦臘泥加」内の註記に「墨瓦臘泥[加]ハ、佛郎幾國人ノ姓名ニ係リ(墨瓦臘泥係佛郎幾國人姓名)」とあり、二つ目は、同幅、「寧海(南太平洋)」中に記載する吳中明の序文中に「利山人(利瑪竇のこと) 歐邏巴ヨリ中国ニ入り、山海輿地全図ヲ著ス、(中略) ケダシノノ国ノ人及ビ佛郎機國人、皆遠遊ヲ好ム(利山人自歐邏巴入中国、著山海輿地全図、(中略) 蓋其國人及佛郎機國人、皆好遠遊)」と記し、三つ目は、第五幅、「利未亞(アフリカ)」南端沖合の註記に「佛郎幾ノ商賈ハ、船ニ駕リテコノ海ヲ過ギシニ、鸚鵡ノ地ヲ望見ス(佛郎幾商賈、駕船過海、望見鸚鵡地)」とあり、四つ目は、第六幅、「大西洋」中の「木島」近海にある註記に「木島ハ佛郎幾ヲ去ルコト半月ホド、樹木ハ茂翳シ地ハ肥美、佛郎幾人ハ此ニ至リテ、コレヲ焚キ、八年ニシテ始メテ盡キル(木島去佛郎幾半月程、樹木茂翳地肥美、佛郎幾人至此焚之、八年始

盡)とある。<sup>(27)</sup>

このように、『坤輿万国全図』の初版と第一次改訂版では「拂郎機(或いは拂郎幾、佛郎幾、佛郎機とも記す)」と記載するところがポルトガルの国名とその沖合の註記以外に四箇所存在するが、第二次改訂版で「波爾杜瓦爾」と改訂しているのは、「木島」近海の註記にある「拂郎機」だけであり、他の三箇所は修正せずに初版、或いは第一次改訂版のままとなっている。なぜ、リッチはこれら三箇所だけを改刻しなかつたのであろうか。単にリッチの失念によるものなのか。三箇所が「波爾杜瓦爾」と訂正されずに「拂郎機」のままにされていても、決して意味が通じないわけではないが、第二次改訂版の世界図上には「拂郎機」と名付けられた国名や地名がないわけであるから、改訂されない三箇所の註記や序文を理解することは困難であつたろう。

それでは『両儀玄覽図』では、それら四箇所の「拂郎機」と記す部分はどのようなようになっていたのだろうか。実は『両儀玄覽図』でも、『坤輿万国全図』第二次改訂版と同じく、「木島」近海沖の註記だけが「波爾杜曷爾」と改訂されて、他の三箇所は「拂郎機」のままになっている。ただし、世界図上の地名を理解する上では、『両儀玄覽図』がイベリア半島沖に「即ち回回ノ稱スル所ノ拂郎機」という註記を残しているために、閲覧者には「拂郎機」という文字を残す註記三箇所は充分に理解することができたであろう。

以上、ポルトガルの国名をめぐる、『坤輿万国全図』の初版と第一次改訂版、並びに第二次改訂版、さらには『両儀玄覽図』との相違について見てきたが、ここで問題となつている「拂郎機」という呼称について若干ふれておきたい。

「拂郎機(フランキ、或いはフランク)」とは、元来は、イスラム圏に住む人々が西欧諸国の人々に対して呼んでいた言葉であつた。それを当時の中国人がマラッカに進出したポルトガル人の使用する火炮に対して「拂郎機銃」、或いは「拂郎機式」と呼称するようになり、それがついにはポルトガルという国をあらわす言葉として使

用されるようになったのである。<sup>(28)</sup>

このように中国人が使用している「拂郎機」という呼称の誤解にリッチは気付いていたのであろう。それがために、リッチは『坤輿万国全図』の初版ではポルトガルの国名を中国人の世界地理観に迎合するかたちで「拂郎機」と刻しつつも、註記で「拂郎機乃回回誤稱本名波尔杜葛尔」と説明を加えたわけである。ところが、その後リッチは、『両儀玄覽図』を刻版する段階では、註記にあつた「波尔杜葛尔」をポルトガルの国名表記に使い、中国人士大夫の理解を助けるために、国名の傍らに「即回回所稱拂郎機」と記載したのではなからうか。<sup>(29)</sup>ところで「拂郎機」という西欧の国々とは全く関係のない漢語の誤称に気付いていたリッチが、どのような理由から国名表記の書き換えを行ったのであろうか。勿論、リッチが自ら気付き国名変更をおこなった可能性は強いが、リッチに「拂郎機」の使用を躊躇させたイエズス会士がいたとするならば、次に見る人物が可能性として考えられるかもしれない。

後述するように、万曆三十年から同三十一年当時、在華イエズス会士の総数はリッチを含めて七名、その中でもポルトガル生まれの者は三名いた。万曆三十年の半ば頃までは、北京の教会堂にポルトガル出身の宣教師は一人も居住していなかったのであるが、同年七月にポルトガル出身のマヌエル・ディアス(Manuel Diaz 漢名は李瑪諾、一五五九〜一六三九年)が北京に到着したのである。<sup>(30)</sup>ディアスは、巡察師アレックスサンドロ・ヴァリニャーノ(Alessandro Valignano 一五三九〜一六〇六年)とともに万曆二十五年(二五九七)にマカオに到着した宣教師であり、彼はそこで四年余り過ごした。そして万曆二十九年(一六〇一)には今後の中国教会の方向を探るべく、韶州、南昌、南京、北京の教会堂を訪ねる旅へと出立したのである。結局、ディアスは翌万曆三十年の七月に北京に到着し、そこで二ヶ月間にわたってリッチと協議し、また南昌へと帰路についたのであるが、まさにディアスが北京に到着した時期は、『坤輿万国全図』初版が刷り上がった時であった。ディアスが『坤輿万国

全図』を見てどのように感じたのか知る由もないが、『坤輿万国全図』初版が刊行された時期に、ポルトガル出身のディアスが北京に滞在していたという事実は、ポルトガルの国名表記の改訂に関連して重要な意味を持つものではないだろうか。

万曆三十年七月当時のこうした北京教会堂の状況を念頭に置けば、リッチが『坤輿万国全図』のポルトガルの国名表記を原音からは想像だにできない「拂郎機」という漢語から、「波尔杜葛尔」へと改訂した契機にディアスが何らかの係わりを持ったのではないかと推測することも可能ではないかと考えられる。

以上、北京のイエズス会士らの動向にふれながら、ポルトガルの国名表記の改訂について検討を加えてきたが、これらの点から推察するならば、海野一隆氏が述べるように、万曆三十年七月に『坤輿万国全図』が刊行されるや（初版）、その後、版木を所有する李之藻が自らの序文のみを修正した第一次改訂版『坤輿万国全図』を版刻したのは間違いない。しかし、次に改訂されて刊行されたのは、第二次改訂版『坤輿万国全図』ではなく、翌万曆三十一年八月にマテオ・リッチがポルトガルの国名表記を「波尔杜葛尔」と訂正し、イベリア半島沖合の註記を「即回所稱拂郎機」と改刻した『両儀玄覧図』であったであろう。もしこの推測に間違いがなければ、第二次改訂版『坤輿万国全図』は、『両儀玄覧図』刊行後に、ポルトガル国名をさらに「波尔杜瓦爾」と改刻し、イベリア半島沖合の註記は埋木して削除し、さらに「九重天図」の第八重天の数字を新たに修正した上で版行したということになる<sup>31)</sup>。

ところで、『両儀玄覧図』には、地名表記の点で、『坤輿万国全図』諸版本とは異なる部分がある一箇所存在する。誰が、なぜこのような改訂を企てたのか次項で考察してみたい。

(3) イスパニア地域地名表記の特徴

『坤輿万国全図』諸版本の「以西把你亞(イスパニア)」地域に注目すれば、ポルトガルの国名表記を除いたイペリア半島内にある国名・地名は、諸版本ともに同様であり、相違するところはない。しかし、『両儀玄覽図』には、『坤輿万国全図』諸版本とは異なる地名が見えるのである。

『両儀玄覽図』と『坤輿万国全図』との地名の違いは、両図を比較すれば一目瞭然である(第5、6図参照)。相違するところは、「俺大魯西亞(アンダルシア)」を記載する位置である。『坤輿万国全図』では、「俺大魯西亞」をイスパニア北部に版刻しているが、『両儀玄覽図』では、地中海側の「葛荅龍亞(カタロニア)」に隣接する位置に「俺大魯西亞」を移動させている。それともない「俺大魯西亞」が版刻されていた地域には、これまで『坤輿万国全図』には全く見えなかった新たな地名「加西刺」が書き加えられている。世界図に見える地名の表記に限定すれば、『両儀玄覽図』の刊行に際して、これほどの地名変更をしたところは他にない。勿論、現在のイスパニア地域の地名をもとに考えれば、『両儀玄覽図』の表記の方が正しいということになるが、リッチは『坤輿万国全図』で、なぜこのような誤りをおかしてしまったのであろうか。

リッチが『坤輿万国全図』を作製するに際して利用した西欧製世界図や地理書は、一・二にとどまらなかったことは既に諸先学によって指摘されている。<sup>32</sup>「俺大魯西亞」の地名表記がそれら西欧製世界図や地理書ではどのようなになっているのであろうか。いずれにせよこの誤記は、リッチが原板を作製するに際して誤ってしまったものと考えてよいであろう。

それでは『坤輿万国全図』における「俺大魯西亞」の誤表記に気付いたのは誰なのであろうか。勿論、最初にリッチ自身が誤りを見つけた可能性はあるが、他のイエズス会士によって誤記が指摘された可能性も残る。もしそうであるならば、その人物とは誰なのか。

前述したように、万曆三十一年当時、在華イエズス会士は七名であった。前述したディアスとリッチを除いて、その内訳は韶州にシチリア島出身のロンゴバルディ (Nicolas Longobardi、漢名は龍華民)、南昌にポルトガル出身のジョアン・ソエイロ (Joan Soerio、漢名は羅如望)、南京には、ジェノバ近郊出身のカツタネオ (Lazzaro Cattaneo、漢名は郭居靜、一六〇二年末に病氣のため南京を離れ、一時マカオへ) とポルトガル生まれのジョアン・デ・ローチャ (Joan de Rocha、漢名は羅如望)、そして北京にはマドリード近郊バルデモロ出身のパントーハ (Diego de Pantoja、漢名は龐迪我) が滞在していた。<sup>(33)</sup>

彼らの中で、一番に想起されるのは、やはりパントーハであろう。イスパニア出身の彼は、万曆二十七年(一五九九)にマカオに到着するや、リッチが神宗皇帝に進呈しようとしたチェンパロの調律法を伝授するために南京に赴き(同二十八年)、そこからリッチとともに北京に入城して(同二十九年)、以降、北京の教会堂に滞在しながらリッチのよき協力者となった人物であった。これ以上の推測は慎まなければならないが、『坤輿万国全図』初版が刊行された当時、来華して間もないパントーハにとって、漢語の読み書きは未だ不慣れであつたらう。母国のイスパニア地域に記載された漢語の地名を見て、彼はリッチに尋ねたのかもしれない。そのようなことが契機となつて、リッチは「俺大魯西亞」の誤りに気付いたとも考えられるのである。

しかし、このように『両儀玄覽図』の版刻にあつて、イスパニア地域内の地名変更という措置がとられたにもかかわらず、後にリッチが『坤輿万国全図』第二次の改訂を行う際に、「俺大魯西亞」の位置変更をしなかったのはなぜであろうか。『両儀玄覽図』の版行から『坤輿万国全図』第二次改訂の刊行まで期間が開きすぎていたため、リッチはそれについて失念してしまつたのであるうか。もしそうであるならば、『坤輿万国全図』第二次改訂版は、海野一隆氏が述べる如く、万曆三十一年七月以前に行われたのではなく、『両儀玄覽図』が刊行された万曆三十一年八月以降、それもしばらく後の刊行と考えなければならぬかもしれない。

『坤輿万国全図』第二次改訂版が印刷された年月については、それを傍証するだけの史料に乏しい。新たな史料の発掘に努めなければならないであろう。しかしいづれにせよ、ポルトガルの国名表記とイベリア半島沖合の註記、並びに「九重天図」の八重天の記載に注目するならば、『両儀玄覧図』刊行前に『坤輿万国全図』第二次改訂版が版刻されることはなかつたであろう。<sup>34)</sup>

『両儀玄覧図』は、『坤輿万国全図』諸版とは異なり、現存するものは少ない。また、研究者が自由に閲覧できるようにになったのも最近のことである。しかし、その内容が『坤輿万国全図』とほぼ同じようなものであると見なされてしまったために、これまで十分な分析が行われてこなかつたようである。ところが既に論じたように、『坤輿万国全図』に記載する国名・地名、或いは天文図などの相違から『両儀玄覧図』の特徴が浮かび上がってくるのである。その最たるものは、やはり「十一重天図」の内容である。この図は、『両儀玄覧図』の依頼者である李應試が天主教徒であつたればこそ可能であつたものである。あるいは『両儀玄覧図』は天主教信徒への頒布を想定して版刻されたのではないかと推測することも可能かも知れない。さらに『両儀玄覧図』で注目されるのは、イベリア半島内の地名の書き換えであろう。小さな改刻であるが、正確な地理情報を中国の知識人に提供しようというリツチの熱意が伝わってくるようである。

マテオ・リツチが作製した『坤輿万国全図』や『両儀玄覧図』を含む一連の世界図には、未だ謎が多い。残された問題は今後の課題としたい。

註

(1) 黄炳仁氏が所蔵していた『両儀玄覧図』は、同氏の家で地図学史上のような意味を持つものであるのか不明のまま、長い間にわたり三百年余り前の先祖が中国の皇帝から下賜された「家宝」として伝えられていた。ところが一九三六年になると、当時早稲田大学商科に在籍していた同氏が地図学史研究者の中村拓氏や鮎澤信太郎氏に同図の調査を依頼することとなり、その結果、同図はこれまで現存が確認されていなかったマテオ・リッチの『両儀玄覧図』であることが明らかとなったのである。鮎澤信太郎氏は、同図の調査結果を「利瑪竇の両儀玄覧図に就いて」(『歴史教育』十一巻七号、歴史教育研究会、一九三六年)と題して発表したこと、『両儀玄覧図』の現存が初めて世に紹介されることとなった。『両儀玄覧図』が一九三六年に学界に知られるようになった経緯や、江戸時代の日本人学者の『両儀玄覧図』に対する批評については、鮎澤信太郎「マテオ・リッチの両儀玄覧図について」(『地理学史研究』第一集、柳原書店、一九五七年)にまとめられている。

ところで、黄炳仁氏は調査の後、『両儀玄覧図』を郷里の朝鮮に持ち帰ったのであるが、その後朝鮮における一九四五年八月以降の社会的混乱や一九五〇年六月から始まっ

た朝鮮戦争によって、その行方は全く不明となってしまう。

(2) 瀋陽の故宮が所蔵していた『両儀玄覧図』については、金敏叡「瀋陽故宮新発見的明代史料」(『国季刊』七巻一号、一九五〇年)によって、初めて現存が知られるようになった。しかし、当時、日本を始めとする欧米諸国は中華人民共和国と国交がなかったため、こうした情報が入ることとはなかった。その現存が知られるようになるのは、一九九〇年代に入ってからである。

(3) 本文で述べたように、朝鮮で見つかった『両儀玄覧図』は、当初黄炳仁氏が所蔵していたのであるが、同氏は一九四五年に手放してしまい、新たに金良善氏が所有するところとなった。『両儀玄覧図』は、金良善氏が主管する韓国基督教博物館で所蔵・保管していたが、朝鮮戦争時には戦禍を避けるために一時土中に埋められたりしたこともあった。結局、同図は一九六七年七月に金良善氏が母校の崇実大学校に寄贈し、大学側も同氏の寄贈品を保存するための機関として大学内に韓国基督教博物館を建設して、そこで保存・管理することとなった。『両儀玄覧図』が金良善氏の所蔵になってからの経緯については、金良善「明末清初

耶蘇會宣教師들이 製作한 世界地圖과 그 韓國文化史上에  
미친 影響」(『崇大』六号、一九六一年、同論文は、同氏『梅  
山国学散稿』に再録、崇田大学校博物館、一九七二年、一  
八七頁)でふれている。

ところで、上記『梅山国学散稿』の発行先が崇田大学校  
博物館となっているために、これまで『両儀玄覧図』の所  
蔵機関を崇田大学校博物館としたり、崇実大学図書館、或  
いは崇実大学校博物館とするなどの混乱が見られるが、次  
に見る如く、その原因は学校名の変更によって生じたもの  
である。

崇実大学校の校名は、一九〇一年の崇実学堂創設より始  
まるが、同校は一九二五年に崇実専門学校と校名を改称  
し、一九三八年には閉校となつてしまった。その後同校は、  
一九五五年に校名を崇実大学校として再出発することとな  
つたが、一九七〇年九月に大田大学校(一九五六年創設)  
と統合した際に、校名を崇田大学校と改めた(校名の変更  
は一九七一年一月から)。ところが、如何なる事情か不明  
であるが、一九八六年一月になって再び校名を崇実大学  
校と改め、現在に至っている。

また、崇実大学校にある韓国基督教博物館は、それまで  
金良善氏が個人で所蔵していた朝鮮キリスト教会や朝鮮史  
に関する資料三六〇〇点余りを、彼が崇実大学校に寄贈し

たことから発足した博物館である(なお、同氏は寄贈と同  
時に崇実大学校に教授として奉職することとなった)。

『両儀玄覧図』が韓国の崇実大学校に現存しているとい  
う情報が日本の学界に伝えられたのは、船越昭生氏が「昨  
年(一九七〇年——筆者註)来日された李燦教授のもたら  
された情報によると、この久しく跡を失っていた地図は現  
在崇実大学図書館に蔵せられるという。三十数年ぶりにこ  
の世界唯一の地図の行方が判明したのである」(朝鮮にお  
けるマテオ・リッチ世界地図の影響)『人文地理』二三卷  
二号、一九七一年、一一九頁)と述べることから、一九七  
〇年頃ということになるであろう。

崇実大学校韓国基督教博物館が所蔵する『両儀玄覧図』  
は、そもそも誰が、いつ頃に朝鮮に将来したのかというこ  
れまでの通説に対する疑義と、現存する同図以外に朝鮮に  
『両儀玄覧図』が持ち込まれた可能性はなかったのか、と  
いう問題については、拙稿「朝鮮に伝来した利瑪竇『両儀  
玄覧図』」(『朝鮮学報』二〇一輯、二〇〇六年)で詳しく  
論じているため、そちらを参照されたい。

(4) 瀋陽の故宮で所蔵していた『両儀玄覧図』は、現在、  
遼寧省博物館で所蔵している。しかし、同図の閲覧につい  
ては、同博物館の建て替えや資料再整理中との理由で未だ  
調査出来ない状況にある。本来であれば、現存する『両儀

「玄覽図」の両本が同版であるか異版であるか検討した上で『坤輿万国全図』との比較を行わなければならないのであるが、上記のような理由から直接原本を見ての比較検討は出来ない。しかし、遼寧省博物館所蔵『両儀玄覽図』は、その大型の写真印画が『中国古代地図集・明代』(文物出版社、一九九四年)に収載されているため、それを見ることによってある程度の比較検討は行うことができる。以下、同書の写真印画から見た遼寧省博物館所蔵『両儀玄覽図』(以下、遼寧省博物館本と略記す)の特徴を述べてみたい。

遼寧省博物館本の大きさは、同書に「二〇〇センチメートル×四四二センチメートル」とある。また、写真印画を見る限り、同本は八幅からなり、各幅の版木の切れ目も崇実大学校韓国基督教博物館所蔵(以下、崇実大学校本と略記す)のものと同様である。さらに各幅に記載する地名、地誌表記の位置、文字の形状も崇実大学校本のものと同じである。以上の点から、遼寧省博物館本は、崇実大学校本のものと「ほぼ」同版と見て間違いはあるまい。しかし、両本を同版と見るには少なからず不安も残る。なぜならば遼寧省博物館本のものには次に見るような特異な点が存在するからである。

先ず第一にあげなければならないのは、題字である。遼

寧省博物館本を一見すれば、題字の「玄」と「図」の両字が崇実大学校本と異なっていることが分かる(なお、遼寧省博物館本では「覽」字が完全に剥落している)。題字が異なっていることからすれば、両本は異版ではないかとの疑いもわいてくるが、遼寧省博物館本全体を仔細に見ると、同本の題字は、後年の墨書であることが分かるのである。

なぜならば、遼寧省博物館本の第二の特徴とも関連するが、同本では、「亜細亜」「欧羅巴」などの五大州の地名や大洋・海洋名(例えば日本列島の東方に記載する「東洋」や列島の西南海にある「大明海」など)の横に、満洲文字で同じ地名・海洋名を墨書しているのである。そして、その地名や海洋名の満洲文字の墨色と題字である「両儀玄〇図」の墨色とが同じなのである。つまり、遼寧省博物館本は、題字と満洲文字だけが異様に黒色となっている。いざこれにせよ、最終的に遼寧省博物館本の題字が印刷されたものなのか、墨書されたものなのかは、直接原本を精査しない限り結論は出せないであろうが、同本の写真印画を見た限りでは、題字は後年の墨書と見て間違いないと考えられる。

このように、遼寧省博物館本は、図中に満洲文字を墨書しているという特色を持つものであるが、さらにもう一つ

の特色は、五大洲内に書き込まれている山脈に交互に薄い青と緑で彩色を施しているという点である。彩色されているのは山脈のみで、河川や海洋に着彩している形跡は見えない。

以上、簡単に遼寧省博物館本の特色について述べてきたが、崇実大学本との相違が少なからず存在することに気付く。しかし前述したように、版本として両本は、同版と見て差し支えないのではないかと考える。黄時鑒『利瑪竇世界地圖研究』（上海古籍出版社、二〇〇四年）においては、遼寧省博物館本と崇実大学本を異版として言及はしていない（一五六〜一五八頁）。いずれ遼寧省博物館本については実見する機会を訪れることであろう。精査した結果については、後日を期したい。

(5) 海野一隆「明・清におけるマテオ・リッチ系世界図」（山田慶児編『新発現中国科学史資料の研究…論考篇』京都大学人文科学研究所、一九八五年）を参照。同論文は、同氏『東西地図文化交渉史研究』（清文堂出版、二〇〇三年）に再収録。

(6) 『坤輿万国全図』に関する研究は古く、二十世紀に入るやその研究は本格化し、今日に至っている。同図に関する研究の推移については、川村博忠「オーストリア国立図書館所蔵のマテオ・リッチ世界図『坤輿万国全図』」（人

文地理』第四〇巻第五号、一九八八年、一七〜一八頁）に簡潔に紹介されているため、そちらを参照されたい。

なお、本論で後述するが、現存する『坤輿万国全図』の版本や模写本を比較検討して、「九重天図」の八重天に記載する年数、李之藻序文中の語句、ポルトガル国名表記において少なからず相違のあることに初めて気付いたのは青木千枝子「日本に現存する『坤輿万国全図』諸図について」（『キリシタン文化研究会会報』一〇二号、一九九三年）であった。同氏は、この論文において『坤輿万国全図』には改訂版が存在したのではないかと推測したのであったが、これをさらに検討した海野一隆氏は、『坤輿万国全図』は万曆三十年（一六〇二）七月に初版が刊行されたものの、その直後に李之藻の序文のみを改訂した第一次改訂版が出され、さらにその後、「九重天図」の一部とポルトガルの国名表記を改刻した第二次改訂版が版行されたとする新たな説を提唱した（同氏「利瑪竇『坤輿万国全図』の諸版」、『東洋学報』八七巻一号、二〇〇五年）。

『坤輿万国全図』は版本であるが、初版、第一次改訂版ともに版本は現存していない。本論で言及する現存明刊本『坤輿万国全図』とは、この第二次改訂版のことである。

この現存明刊本『坤輿万国全図』は、現在ヴァチカン図書館、宮城県図書館（分割原寸大のものが一九九七年に臨川

書店覆刻本として刊行されている)、京都大学附属図書館(ただし図中のイエズス会会章は削られている)、国立公文書館(ただし現存するものは主図の卵形世界図のみである)で所蔵している(それ以外の清代の後刻本を含めた所蔵先については、海野一隆氏の前掲「利瑪竇『坤輿万国全図』の諸版」、註(2)で詳しくふれているのでそちらを参照されたい)。

(7) 鮎澤信太郎氏は、上掲の論文「利瑪竇の両儀玄覽図に就いて」において、『坤輿万国全図』と『両儀玄覽図』との主な相違点について既にふれている。それによれば、両図ともに大型の世界図でありながら、形態が『坤輿万国全図』の全六幅から『両儀玄覽図』の全八幅へと変更されたこと。『坤輿万国全図』第一幅の「九重天図」が『両儀玄覽図』においては「十一重天図」に改刻されたこと。『坤輿万国全図』中に記載された六名による序文・跋文が、『両儀玄覽図』では呉中明の序文を除いて他は全て別人のものに変更されていることをあげている。しかし、それ以外の図中に記す地名・地誌の内容はほとんどが同じであるとしている。

その後『両儀玄覽図』の内容に言及する論考では、鮎澤氏とほぼ同じような見解が述べられている。例えば、王綿厚「利瑪竇『坤輿万国全図』和『両儀玄覽図』的比較研究」

(『遼海文物学刊』一九九五年一期、一九九五年)において、両図の「繪図技法と投影方式」、「地理要素と地名大部分」、「両図中の附図、附表と多数の図解」は同様であると結論している(実際のところ、地名の大部分は同様と述べながら、相違する箇所やその地名が何なのか具体例はあげていない)。このように『両儀玄覽図』は、「十一重天図」と中国人士大夫の序文を除けば、特にその地名表記において『坤輿万国全図』の翻刻とさして変わらないものと見なされてしまったために、これまで地図学史研究者の間で、特段注目されてこなかったのかも知れない。

さらには、「九重天図」と「十一重天図」との相違について、両図の内容が異なっている点是指摘されながらも、天文図として「九重天図」と「十一重天図」とは、そもそもどのような内容の違いがあるのか、そのような違いはなぜ出てきたのか、或いは、リッチが『両儀玄覽図』の刻版において、なぜ「九重天図」ではなく「十一重天図」を採用したのかなどという根本的問題については、これまでの研究者はほとんど言及してこなかったようである(なお、「十一重天図」の意味するものについては本論で後述する)。

『坤輿万国全図』と『両儀玄覽図』を一見すれば、鮎澤氏が述べるように、両図の形態の相違、図中の天文図や序

文・跋文が異なっていることは一目瞭然である。果たしてマテオ・リッチは、『坤輿万国全図』刊行の一年後に、天文図以外に何ら新知見を加えることなく新たな世界図『両儀玄覽図』を版行したのであるうか。なお、『坤輿万国全図』と『両儀玄覽図』にそれぞれ著録する序文・跋文の全文は、黃時鑿氏の前掲書に附録として掲載されている。

(8) 一九三六年夏に中村拓氏が初めて『両儀玄覽図』を調査した時に撮影した同図の写真印画は、現在、京都大学附属図書館が所蔵している（なお、その単色複製されたものは前掲の『地理学史研究』第一集に収載されている）。その時の写真印画と現存する『両儀玄覽図』とを比較すると、一九三六年当時、「三幅」、「五幅」、「八幅」以外に、第四幅には「四幅」、第七幅には「七」字がそれぞれ未だにその字体を留めていたことが分かる。

現存の『両儀玄覽図』は、一九三六年に撮影した当時のものに較べれば破損や汚損の著しいところがある。特に現存のものは、第七幅と第八幅の上部が一部土色となり、所々破損している（第八幅上部の「天地儀」はいたるところが欠けている）。写真印画で見ると、一九三六年当時まで同図は極めて良好に保存されていたことが分かる。黃炳仁氏が同図は家の「家宝」として代々伝えられていたと述べるように、門外不出の「家宝」として家蔵されていた

のであろう。しかし、現存するものは、上記の第七幅と第八幅以外にも傷みの甚だしいところが少なからずある。その原因は、おそらく一九五〇年六月から始まった朝鮮戦争の際に、破損や焼失を避けるために三ヶ月間土中に埋められていたことが影響しているであろう。

(9) 鮎澤信太郎氏の前掲論文「マテオ・リッチの両儀玄覽図について」（二四頁）。また同氏の前掲論文「利瑪竇の両儀玄覽図に就いて」には、「縦六尺、横二尺五寸」とある（四九頁）。

(10) 崇実大学校韓国基督教博物館が所蔵する『両儀玄覽図』の発見から現在に至るまでの経緯については、前掲の拙稿「朝鮮に伝来した利瑪竇『両儀玄覽図』」で考察している。

(11) 崇実大学校韓国基督教博物館の図録『승실대학교 한국기독교박물관』(同博物館編、二〇〇四年)には、所蔵する『両儀玄覽図』の大きさを「縦一九九センチ、横四四四センチ」と記載している（三一六頁）。

(12) 現存明刊本『坤輿万国全図』と『両儀玄覽図』とを比較して見た時、やはり現存明刊本『坤輿万国全図』の美麗さには驚かざるを得ない。現存明刊本『坤輿万国全図』のこれまでの研究において、明代の印刷・出版文化という観点からの関心はほとんどなかったようである。しかし、現

存明刊本『坤輿万国全図』の第六幅に「錢塘張文燾過紙、万曆壬寅孟秋日」と二行の刊記があることにより、彫版者は錢塘（浙江省）の張文燾であることが知れる。錢塘は明代後期を通じて出版業が盛んなところであり（米山寅太郎『図説中国印刷史』汲古書院、二〇〇六年、二〇九〜二一二頁）、本文で後述するように、『坤輿万国全図』の依頼者李之藻も同じ浙江杭州の仁和県出身である。彫版者張文燾が自らの名を『坤輿万国全図』の末尾に署名したのは、当時の慣行であったであろうが、それに比して『兩儀玄覽図』は彫版者名を残していない。なぜなのであるうか。著名な書肆の手を通さずに版刻されたのであろうか。

現存明刊本『坤輿万国全図』に記す二行の刊記の存在は、リッチが作製した世界図がどのように印刷・出版・流通していったのか、考えさせられるものがある。ただし、『坤輿万国全図』が浙江の錢塘で彫版・印刷されたのであれば、実はそこから『坤輿万国全図』諸版に関して種々の問題が派生してくるのであるが、本稿は『兩儀玄覽図』を論ずるものであるために、ここでは問題が存することを指摘するにとどめたい。なお、米山寅太郎氏の『図説中国印刷史』には、現存明刊本『坤輿万国全図』の明代印刷史上における位置づけが簡単ではあるが述べられており有益である（一九四〜一九六頁）。

(13) 『兩儀玄覽図』と現存明刊本『坤輿万国全図』との相違については、前掲の鮎澤信太郎「利瑪竇の兩儀玄覽図に就いて」、同「マテオ・リッチの兩儀玄覽図について」で述べている。

(14) 世界図総説の八箇所の相違は次の通りである。『坤輿万国全図』では、一行目「地與海本是圓形而合爲一球」、「居地球之中誠如雞子黃」、三行目「地之東西南北各一週有九萬里」、四行目「以身之所居分上下者未然也」、六行目「曰南北亞墨利加曰墨瓦蠟泥加」、七行目「西至河摺亞諾滄即此州」、九行目「每十度爲一方以免雜亂依」となっているが、『兩儀玄覽図』では、一行目「地與海本是圓形合而爲一球」、「居地球之中載如雞子黃」、三行目「地之東西南北各一週有萬里」、四行目「以身之所居分上下未然也」、六行目「曰南北亞默利加曰默瓦蠟泥加」、七行目「西至河摺正諾滄即此州」、九行目「每十度爲一方以免雜亂依」となっている。『兩儀玄覽図』三行目の「萬里」や六行目の「亞默利」、七行目の「河摺正諾滄」などは誤刻と見て間違があるまい。さらに、『坤輿万国全図』では、著者名が「利瑪竇撰」と明確に記名されているのに対して、『兩儀玄覽図』では、著者名が省かれているというような相違がある。

(15) 海野一隆氏の前掲論文「利瑪竇『坤輿万国全図』の諸版」。

(16) 海野一隆氏の前掲論文「利瑪竇『坤輿万国全図』の諸版」によれば、現存していない『坤輿万国全図』初版の模写本は、日本国内に土浦市立博物館所蔵『坤輿万国全図』を始めとして二十七点の所蔵が確認でき、第一次改訂版の模写本は、東洋文庫所蔵清代模写本『坤輿万国全図』に比定できるという(一〇三〜一〇六頁)。

ところで、海野一隆氏は、『坤輿万国全図』初版が万曆三十年七月に刊行された直後に、版木を所有する李之藻が自らの序文を改刻して第一次改訂版を版行し、第二次改訂版は、マテオ・リッチの指示によって李之藻が所持する版木の「九重天図」の一部、ポルトガルの国名表記とその沖合の註記を改訂して刊行したと述べている。ただし、リッチの指示によって第二次の改訂が行われたのは、版木を所有する李之藻が北京に滞在していた時であろうとして(リッチは自らの回想記「川名公平訳『中国キリスト教布教史』二、大航海時代叢書第二期八、岩波書店、一九八三年、一六〇〜一六二頁」で、「李之藻は郷里へ帰る時に版木も一緒に持ち帰ってしまった」と述べている)、「彼の郷里は杭州であり、帰郷というのは年代的に見て福建学政に任命されて北京を発った万曆三十一年七月のことを指しているはずである」と述べ、これを根拠にして、第二次改訂版は万曆三十一年七月以前に行われなければならなかったと断定

しているのである。

しかし、リッチが「李之藻が郷里へ帰る時に版木も一緒に持ち帰った」と述べる持ち帰った時期を福建学政に任命された万曆三十一年七月と限定してよいのであろうか。時期を限定することよりも、まず現存明刊本『坤輿万国全図』と『両儀玄覽図』の内容を比較検討しなければならぬのではないかと考えられる。

本稿の主題とは関係ないが、『坤輿万国全図』に記載する李之藻序文の相違について簡単にふれたい。初版では「元朱思本畫方分里」(初行)、「語不云乎在夷則進」(二十二行)となつてゐるものが、第一次改訂版では「唐賈南皮畫寸分里」(初行)、「異人異書世不易遷」(二十二行)と訂正されている。この改刻は李之藻が勝手に行ったものである。中国における地図学の発生を元朝の朱思本とするよりも、もつと古い唐朝の賈耽にまでたどらせたい李之藻の思いがこうした改刻を行わせた動機である(海野一隆氏の前掲論文「利瑪竇『坤輿万国全図』の諸版」一〇二〜一〇三頁)。勿論、李之藻の改刻にリッチは一切関わっていない。

(17) 船越昭生『坤輿萬國全圖』と鎖国日本』(『東方学報』四一輯、一九七〇年、六四一頁)。

(18) アリストテレス(村治能就訳)『宇宙論』(『アリストテレス全集』第5巻に所収、岩波書店、一九六九年)。

(19) 尾原悟「キリシタン時代の科学思想…ペドロ・ゴメス著『天球論』の研究」(『キリシタン研究』第一〇輯、キリシタン文化研究所、一九六五年、一四九頁)。同書には尾原悟氏による「ペドロ・ゴメス著『天球論』(試訳)」が掲載されているが、同試訳は、在華イエズス会士が中国人士大夫に語つたであろう天文学や気象学がどのような内容のものであつたのか知るうえにおいて有益である。本項の叙述においては上記論文を参考としている。

(20) 朱子の宇宙論・天体論については、山田慶兒『朱子の自然学』(岩波書店、一九七八年)を参照した。

(21) 山田慶兒、前掲書、七四頁。

(22) 尾原悟、前掲論文、一七〇〜七一頁。

(23) マテオ・リッチは、『両儀玄覽図』を刊行した約二年後(万曆三十三年頃)に、天文書である『乾坤体義』を出版しているが、その中に「乾坤体図」と題して『両儀玄覽図』の「十一重天図」と同じ天文図を掲げている。しかし、さすがに第十一重天に「天主上帝発見天堂諸神聖所居永静不動」と版刻するに躊躇したのであるうか、単に「第十一重永静不動」と記載するのみである。なお、『乾坤体義』は、管見の限りでは、原刊本を所蔵するところが不明のため、『欽定四庫全書』、子部に所収されているものを利用した。『乾坤体義』には、『坤輿万国全図』と『両儀玄覽図』に掲

載する世界図総説と天文図総説などがそのまま転載されている。

(24) 「十一重天図」について、当時の中国人士大夫がどのような反応を見せたのか、その詳細は今後の課題としたいが、鮎澤信太郎氏は前掲の「マテオ・リッチの両儀玄覽図について」において、江戸時代に同図を閲覧した西川如見が「十一天ノ説アリト云ドモ無用ノ義也」と述べたり、彼の子である西川正休が「十一天ノ説アリト雖ドモ、此天ノ用ヲ知ラズ」と述べ、批判的に受け取っていたことを明らかにしている(一〇〜一三頁)。

(25) マテオ・リッチは『天主実義』のいたるところで、天主とは如何なる存在であるのか、天堂とは如何なる所かを説いているが、同書、上巻の首篇「天主ガ始メテ天地万物ヲ制シ、而シテ主宰シコレヲ安養スルコトヲ論ズ(論天主始制天地万物、而主宰安養之)」において、太陽や月、惑星がそれぞれの天空を居場所として、乱れずに安定しているのは、尊い主宰者(天主上帝)が天空において秩序正しく主宰しているからであると述べている(至如日月星辰、並麗于天、各以天為本處所、(中略) 倘無尊主幹旋主宰、其間能免無悖乎)。

ところで、これまでリッチの一連の世界図作製と彼の天主教布教との関連について言及した論考はないようである

が、『天主実義』の首篇において、天主が主宰する天と地の世界を説明する際に、「両儀」という言葉を使っている（ソレハ高明ニシテ上カラ覆イ、地ハ廣厚ニシテ下カラ載ス、コレヲ分ケレバ両儀トナシ、コレヲ合セレバ宇宙トナス「夫天高明上覆、地廣厚下載、分之為兩儀、合之為宇宙」。リッチが使う「両儀」という言葉は、おそらくは『易经』「繫辞上」にある「易ニ太極アリ、コレ両儀ヲ生ズ、兩儀、四象ヲ生ジ、四象、八卦ヲ生ズ」を意識してのことであろう。こうした点を考えると、『坤輿万国全図』とは異なり、『両儀玄覽図』は、天主教信徒、或いは天主教に関心を持つ人々を対象にして作製されたもの、つまり天主教布教の一方策として刊行されたのではないかと、ということも推測可能ではないかと思われるのである。いずれにしても、リッチの一連の世界図作製と天主教布教との関連については、今後の課題としたい。なお、『天主実義』の内容については、柴田篤氏の邦訳『天主実義』（平凡社東洋文庫、二〇〇六年）が有益であり、本項でも参考としている。

(26) 海野一隆、前掲論文「利瑪竇『坤輿万国全図』の諸版」(二〇二〇六頁)。

(27) 拙稿「朝鮮儒学者李睟光の世界地理認識」(『朝鮮学報』一九二輯、二〇〇四年、五三〜五七頁)

利瑪竇『両儀玄覽図』攷(鈴木)

(28) 鄭若曾『壽海図編』(嘉靖四十一年「一五六二年刊」、卷一三「経略兵器」条に「佛郎機式」という砲の絵を載せ、その記事に「刑部尚書顧應祥云ウ、佛郎機ハ国名ナリ、銃名ニアラズ」とあることから、「佛郎機」の呼称の意味するものが何であるのか、中国人には以前から混乱があったことが分かる。また、万暦元年(一五七三)に刊行された嚴從簡『殊域周咨録』、卷九「佛郎機」条では、「佛郎機」国の地理・歴史を取り上げると同時に、「佛郎機銃」として火砲の説明も行っている。しかし、『殊域周咨録』においても「別ニ番国ノ佛郎機トイウモノ有リ、前代ニハ中国ニ通ゼズ、或イハ云ウ、コレ喃勃利国ノ名ヲ更メルナリ(別有番国佛郎機者、前代不通中国、或云喃勃利国之更名也)」とあることから分かるように、「佛郎機」国は、現在の東南アジア海域に位置していた「喃勃利国(ランブリ)」(現在のスマトラ西北部)の別名ではないかと認識していたのである。

(29) リッチが「佛郎機」という漢語を使ったことについて、海野一隆氏は前掲論文「利瑪竇『坤輿万国全図』の諸版」で、「(佛郎機の誤称については)リッチもこのことは承知しており、最初は注記としてそのことを説明していたわけであるが、注記程度では不十分と考え、国名表記そのものの変更に至っているのである」(一〇六頁)と述べるにと

どまっている。

改訂前の『坤輿万国全図』初版の模写本が世界で日本にのみ現存する、それも二十点余りにもわたることについては、海野一隆氏が指摘するように、リッチが回想記(前掲書『中国キリスト教布教史』一、一九八二年、四一五頁)で、中国で刻版した自らの一連の世界図や『天主実義』などは、マカオや日本のイエズス会士にも送ったと書いていることから、初版『坤輿万国全図』もいち早く日本にもたらされたため、そこで模写本が作製される可能性が高かったであろう(海野一隆氏の前掲論文「利瑪竇『坤輿万国全図』の諸版」一〇七頁、及び同氏「深田正室の万国全図、準天儀、自鳴鐘」『土浦市立博物館紀要』八号、一九九七年、同論文は、同氏の前掲『東西地図文化交渉史研究』に再収録)。

こうした点を勘案するならば、在日イエズス会士が初版『坤輿万国全図』を見て、リッチに「佛郎機」の誤りを指摘した可能性もあるであろう。

- (30) Louis Fisler, *Notices biographiques et bibliographiques sur les Jesuites de l'ancienne mission de Chine*. 1552-1773. 2 vols. Chang-hai, 1932-34. 本書は、中国に滞留した四六〇名余りにのぼるイエズス会士らの伝記である。マヌエル・ディアスについては、第一巻(七四

〜七七頁)で簡潔にふれられている。

- (31) ポルトガルの国名表記が「佛郎機」から「波尔杜葛尔」へ、さらには「波爾杜瓦爾」へと年を追うごとに改訂されていったのではないかという推測は、マテオ・リッチが死去した万曆三十八年(一六一〇)に来華したイタリヤ人宣教師ジュリオ・アレニ(Jules Aleni; 漢名は艾儒略、一五八二〜一六四九)が天啓示三年(一六二三)に杭州で出版した世界地理誌「職方外紀」の中でポルトガル国名を「波爾都瓦爾」としている事実からも領けることではないかと考える。

しかし、マテオ・リッチがポルトガルの国名表記を二度にわたって改訂し、中国人への理解に努めたにもかかわらず、その努力は実らなかったようである。なぜならば、康熙十七年(一六七八)に編纂が始まった『明史』では、その卷三二五「佛郎機伝」に「佛郎機ハ滿刺加【マラッカ】ニ近シ、正徳中【一五〇六〜二二】、滿刺加ノ地ニ據リ、ソノ王ヲ逐ウ、十三年【一五一八】ニ使臣加必丹末ヲ遣シ、方物ヲ貢ス(佛郎機近滿刺加、正徳中據滿刺加地、逐其王、十三年遣使臣加必丹末等、貢方物)」とあり、未だにポルトガルを「佛郎機」と認識しており、中国人の世界地理認識に対するリッチらの貢献がなかったかの如くである。『明史』のこの記事は、早く船越昭生『坤輿萬國全圖』

と鎖国日本」(『東方学報』四一輯、一九七〇年、六三二〜三三三頁)において紹介されている。

(32) マテオ・リッチが世界図作製の際に利用した西欧製世界図や地理書の原拠については、これまで種々議論されてきたが、世界図の図形については、プランキウス (Peter Plancius 一五五二〜一六二二) が一五九二年に刊行した世界図をもとにしたことが明らかにされている(海野一隆「神宮文庫所蔵の南蛮系世界図と南洋カルタ」、有坂隆道編『日本洋学史の研究』所収、創元社、一九八九年、同論文は、同氏、前掲書『東西地図文化交渉史研究』に再所録されている)。しかし、オルテリウス (Abraham Ortelius 一五二七〜九八) やメルカトル (Gerhard Kremer Mercator 一五一二〜九四) の世界図が利用されなかったという確たる証拠もない(船越昭生、前掲論文『坤輿万国全圖』と鎖国日本、六六六〜六七〇頁)。いずれにしろ、リッチが利用した世界図は複数あったようであるが、『坤輿万国全図』や『両儀玄覽図』に記載された地誌的註記がどのような原拠にもとづいて書かれたのかという点については、これまで本格的に研究されてはいない。

(33) Pfister, Louis 前掲書(五一〜七三頁)。

(34) そもそも海野一隆氏が『坤輿万国全図』第二次改訂版は万曆三十一年七月以前に改刻されていなければならない

と強調するのは、リッチが回想記で、万曆三十二年に王宮から六幅の世界図を絹布に印刷して十二組ほしいと依頼された時に、『坤輿万国全図』の版木は李之藻が郷里に持ち帰っており、さらにもう一本の工人模刻本の版木もその年の豪雨で壊れてしまったと述べているからである(前掲書『中国キリスト教布教史』二、一九八三年、一六〇〜一六二頁)。つまり王宮から依頼を受けた万曆三十二年の時には、版木は李之藻が郷里に持ち帰っており、リッチの指示がなければ到底できないポルトガルの国名表記や「九重天図」の改刻は、当然、李之藻が北京を離れる万曆三十一年七月までにおこなわなければならないとしてい

るのである。しかし、同時に海野氏は、万曆三十二年に王宮から依頼されてリッチらが作製した世界図は、一時北平歴史博物館で所蔵していた図像追加手書き『坤輿万国全図』(絹布本、現在は行方不明)であるとし、現在南京博物院で所蔵する同図の模写本を考察の対象としている。ところが、この模写本の内容は、李之藻の序文のみ改刻されており、ポルトガル国名は「拂郎機」と表記し、「九重天図」も初版のまま、つまり『坤輿万国全図』第一次改訂版と同様なのである。

北平歴史博物館が所蔵していた図像追加手書き『坤輿万国全図』は、絹布本であり、またその内容(当時西欧で流

布していた海獣や船舶が描かれている)からいっても、王宮から依頼された十二組の世界図の中の一本であろう。もしそうであるならば、万曆三十一年七月までに改刻されたといとする「波爾杜瓦爾」の国名や八重天の「二十八宿天四萬九千年」が王宮から依頼された世界図にも活かされていたはずであろうが、そうはなっていないのである。

リッチが王宮から絹布に印刷したものを献上するよう依頼されたとしても、版木でもって絹布に印刷するのはほぼ不可能であろう。そうであるからこそ、絹布に手書きされ

たものが献上されたわけであるが、そうであるならばそもそも李之藻の所有する版木は必要あるまい。

これ以上の推測や憶測は慎まなければならぬが、リッチの回想記そのものにも問題があるのかも知れない(海野一隆氏は上掲論文で、回想記にリッチの誤解や想像があることを指摘している「一一三頁」、平川祐弘『マテオ・リッチ伝』I「平凡社、一九六九年、四八頁」にも同様な指摘がある)。

## On Matteo Ricci (利瑪竇)'s *Yangwihyeonrando* (兩儀玄覽圖)

SUZUKI Nobuaki

The *Yangwihyeonrando*, which is owned by the Korean Christian Museum at Sungsil University in Korea, is a world map published in China by the Jesuit Matteo Ricci in 1603. The *Yangwihyeonrando*, together with the *Gonyomangukjeondo* (坤輿万国全圖) produced by the same Ricci in 1602, are well known world maps. Although the *Yangwihyeonrando* was published around the same time as the *Gonyomangukjeondo*, not much research on the *Yangwihyeonrando* has been carried out. This study analyzes the contents of *Yangwihyeonrando* from a bibliographic point of view, and therefore, the characteristics were explained in comparison with the various editions of the *Gonyomangukjeondo*. As a result, the following points became clear. First, regions of the *Yangwihyeonrando* were rewritten in two places: the country Portugal and Andalucia of Spain. Why was such a revision made? We assume that the rewrite probably involved Jesuit missionaries other than Matteo Ricci. The second point is in regard to the contents of the eleven layers of heaven (十一重天圖) mentioned in the *Yangwihyeonrando*. This astronomical figure demonstrates a special feature when compared with the *Gonyomangukjeondo*. We can presume that this astronomical figure, however, was probably not accepted by Chinese intellectuals. Furthermore, based on the contents of the *Yangwihyeonrando*, an approximation of the *Gonyomangukjeondo*'s original year of publication was made.